



川系男子の『川と人』めぐり No. 11～西九州の川～

坂本貴啓 (筑波大学大学院 生命環境科学研究科 博士前期課程 白川直樹研究室『川と人』ゼミ)

『川と人』めぐり 研究室のゼミ名『川と人』ゼミという言葉をもじって、『川と人』めぐりのタイトルで連載していきます。テーマは川と人。川が好きではない『川系男子』が川めぐりをしながら、川への思いや写真・動画などをご紹介します。

1. 九州川めぐりの続き

2013年2月11日～13日の2泊3日で西九州の川(嘉瀬川, 松浦川, 六角川, 本明川)を周った。8日～10日の福岡での第2回目の遠賀堀川調査を終えて(この報告は別途)の一人旅。10月に周った時は福岡, 熊本, 鹿児島, 宮崎, 大分の1級水系を周り, 20水系中16水系を周っていたので, 今回で残りの佐賀・長崎の4水系を周り九州全ての水系を周ったことになる。これにより中国地方の1級水系13水系を合わせると109水系中33水系を制覇したことになる。

学部時代, Joint of College (九州の大学生を中心とした災害復旧ボランティア)の活動などをしていた頃, 大学生等活動交流会や九州「川」のワークショップ, 九州「川」のオープンカレッジなどの運営に携わっており, 開催地が佐賀, 長崎の時に地域の人と度々交流していたので, 研究では初訪問だが, 自身としては再訪問だ。アポイントを取る際も「いいよ!」の二つ返事でOK!それどころか「〇〇川は私が案内して, その先の△△川は××さんに話を通しといたけん!」とか「宿はうちに泊まってよかよ。」と温かいご厚意の数々。川仲間冥利に尽きる。2級河川も含め以下のような行程で今回の西九州『川と人』めぐりは行われた(表1)。

表1 西九州『川と人』めぐりの行程

日にち	午前	午後	訪問先
2月10日(月・祝)	嘉瀬川	松浦川	さが水ものがたり館 NPO法人嘉瀬川交流軸 蔽木ダム 河童笑和国 虹の松原
2月12日(火)	松浦川	六角川 波佐見川 彼杵川	町切水車 アザメの瀬 武雄河川事務所 佐賀水ネット 波佐見緑と水を考える会 東彼杵清流会
2月13日(水)	彼杵川 中島川 銅座川	本明川	彼杵川魚道 長崎よか川交流会 本明川オビニオン懇談会 長崎河川国道事務所諫早出張所

2. 成富兵庫の治水の続べが残る嘉瀬川

NPO法人嘉瀬川交流軸

高速バスは佐賀大和ICを降り, 周辺で下車し, 『さが水ものがたり館』に到着。この建物は建設中の僕が高校生の頃から知っていて大変愛着のある場所だ。

この建物は嘉瀬川の水利史跡『石井樋』の復元とともにつくられた施設であり, 鍋島藩(佐賀藩)の家老の成富兵庫茂安の数々の治水・利水工事を学ぶことができる。館内に入ると「NPO法人嘉瀬川交流軸」の事務局の宮崎さんと理事長兼佐賀大学名誉教授の荒牧軍治先生が迎えて下さった。(宮崎さんも荒牧先生も10月に九州川めぐりをした際に筑後川フェスティバルでお会いしていた。)

嘉瀬川交流軸についてお話を伺うと, 本団体は2010年に設立され, 2011年8月にNPO認証設立されたばかりのまだ新しい団体である。脊振山系から流れ, 有明海に注ぐ嘉瀬川の上下流交流の軸になることを目的に新設された。2012年度からはさが水ものがたり館の管理運営も行っている。2010年には, 佐賀導水の完成により, 河川管理の管轄が武雄河川事務所から筑後川河川事務所に移管されたことをはじめ, 嘉瀬川ダム完成(2012年)など新たな嘉瀬川の歴史が始まろうとしている。

また, 水ものがたり館の事務局をされている宮崎さんは数々の生涯学習施設で勤務された経験のある方で, お話を伺うと「佐賀県は生涯学習施設が多い。普通の生涯学習施設なら佐賀市中心部にあった方が便利だろうけど, ここに学習館が存在する価値はなんなのかしらっかり考えて伝えるものを差別化していかなくちゃいけない。」とおっしゃっていた。いつの時代もそこに変わらずに流れる川はまさに生涯学習の題材として価値のある教材であると思う。この日も午後から長崎方面からやってきた中高年の団体の方々が嘉瀬川の歴史に関して荒牧先生から説明を受け, 施設見学をされていた(図1)。

1時間程度お話しした後, 外の史跡も見学。石井樋公園の番屋付近からは嘉瀬川の水利史跡が見学できる

(図2)。この風景は何度みた風景か。最初は高校生の頃, 遠賀川水辺館のリバーツーリズムの補佐員として, ドイツの河川技術者の案内で, 九州川のオープンカレッジでEボート体験の場としてなどなど四季折々に思い出がある。思い返せば最初に来た時から8年近くが



経っている。僕は歳をとったが、嘉瀬川の流れは変わらずにそこにあった。

何度見ても当時の水利技術の高さに驚かされる。仕組みとしてはこうだ(図3)。まず、象の鼻と呼ばれる水制にぶつかった水が川の中央部で大井手堰に当たり、そこで逆流して緩やかになった水が象の鼻と天狗の鼻と呼ばれる構造物の間をゆっくりと流れ、砂を取り除いた利水用の水が石井樋から多布施川に流れ、佐賀城下を潤している。洪水時には石井樋を閉じ、利水と洪水を分離する優れた機能であったと推測されている。治水家として野中兼山や加藤清正、武田信玄などが全国的に有名ではあるが、佐賀平野を洪水から守り、土地を潤した成富兵庫の治水の統べは未だにここに息づいている。成富兵庫の碑に手を合わせ、後にした。



図1 嘉瀬川について説明を受ける来館者



図2 脊振山地と嘉瀬川と象の鼻



図3 成富兵庫が築いた石井樋の水利システム
(佐賀水ものがたり館の展示模型より)

3. 松浦川

3.1 佐賀県一の巖木ダム

さが水ものがたり館を見学した後、自然と暮らしを考える研究会代表の石盛信行さんに案内していただいた。石盛さんは松浦川水系の巖木川(きゅうらぎかわ)を中心に活動しており、町切水車に復元に取り組んでいる方だ。川のワークショップで発表を聴いて以来、ぜひ一度伺ってみたいと思っていた場所である。

まずは巖木ダムに向かう。その途中、唐津市役所巖木支所に立ち寄る。あれ?今日休日なのにどうして? と思っていたら、休日の薄暗い役所内で職員さんが待っていて下さった。石盛さんが「筑波大の学生が来るからちょっと説明してあげて。」と事前をお願いをしてくださったらしい。休日にボランティア出勤をしてくださっていて大変恐縮だった。職員のKさんに同行していただき、ダムサイトへ。巖木ダムは松浦川水系の巖木川に建設された多目的ダム(F:洪水調整、N:不特定用水、W:上水道用水、I:工業用水、P:発電用水)で、堤高117m、有効貯水量11,800,000m³の佐賀県でも高いダムである。しかしながら、嘉瀬川ダムと比較すると堤高は97mであるものの、有効貯水量は68,000,000m³と明らかに嘉瀬川ダムの方が大きい。たしかに巖木ダムのダム湖(きよのうみ)はそんなに奥行がないのがそんなにないので、見た目でもそんなに貯水量は大きくないことがうかがえる(図4)。(最近ダムをよく見るからかなんとなく、ダムの有効貯水量がどの程度か分かるようになってきた。これは川系男子としては大きな成果かもしれない。)ダムサイトの端にあるダム管理所でダムカードをもらって獲得。ダム湖周辺を周ると、佐用の湧水という名水百選もあった。美味しい水と評判で、遠くから汲みに来られる方も多らしい。山の各所から湧き出た水がやがて巖木ダムに貯まっているのかと思うと巖木ダムの水道水がなんだか美味しそうに感じられてきた。

このダム湖の上流周辺は公園や河川プールが整備されていて、レクリエーション機能が充実している。これは周辺地区の人と水源地ビジョンを考えて地域振興にも力を入れているためである。この地区の人達が中心となって周辺の散策路の草刈りや並木の手入れなどを行っている。5月には川の上を泳ぐこいのぼりや6月にはダム湖周辺の梅ちぎりなどで賑わうという。佐用の湧水のあずま屋も自身らで建てたという。ちなみにこの巖木ダムが竣工したのは昭和62年。僕と同年。僕の寿命が先かダムの寿命が先かは定かではないが、これから共に同じ年を重ねていき、どこまで同年でいられるかを考えると大きなロマンにも思えた。休日にも関わらずわざわざご説明に来て下さったKさんありがとうございました。



図4 巖木ダム湖（佐用の湖）

3.2 得須恵川で総理大臣と対談！？-河童連邦笑和国-

巖木ダムをあとにし、巖木川を下り、巖木川と松浦川が合流。その後も松浦川を下る。「次の場所についてよ。」石盛さんに連れてきていただいたのは物産館。「総理大臣がここにいるから、色々聞きたいことを聞けばいいよ。」（ん？石盛さん今なんていった？物産館に総理大臣？）よく分からないまま奥に通され、謁見したのは富永祐司総理大臣。日本国の内閣総理大臣にはそういう名前の方は歴史年表を見ても載っていない。総理は総理でも河童連邦笑和国の総理大臣である。松浦川水系の特須恵川で1988年から活動されている。この河童の国、ただ得須恵川だけで活動しているわけではなく、ちゃんと外交もしている。毎年、全国の河童各国が顔を合わせる『河童サミット』なるものも開催されていて、2013年で26回を数えるそうだ。各国の総理大臣や大統領、総裁はじめ河童の国の人達が参加し、親睦を深め、全国に友好的な河童の和が広がっているそうだ。ちなみに全国組織は『河童連邦共和国』があるらしく、東京に大統領府があるようだ。恐れいった河童ワールド……。

この富永さん達の活動は大変古くもう20年目を越え、2008年に成人式をされたそうだ。富永さん達が子どもの頃、徳須恵川周辺で河童のごとく遊んでいたように、子どもを川に呼び戻したいという想いが20年の活動を支えた。そして河童の国というユニークさこそが、楽しく続いている秘訣かもしれない。河童連邦笑和国バンザーイ！写真は徳須恵川の橋にいた河童の徳平（図5）と波多吉（図6）。



図5 得平



図6 波多吉

3.3 松浦川の河口へ

河童連邦笑和国をあとにし、どんどん松浦川を下る。川を下ると河口が近づき、松浦大堰や唐津城、虹の松原が見えてきた。松浦大堰（図7）の上流は湛水区間になっており、漕艇練習場になっており、練習を終えた中学生が夕暮れの川沿いを帰宅していた。一人転んで血が出てしまったようで、「大丈夫？」と友達に寄り添われながら帰っているのをみるとなんだか微笑ましい。松浦大堰をさらに下流へ下るといよいよ松浦川のフィナーレへ。河口左岸側の崖の上には唐津城が高くそびえたっていた（図8）。松浦川の右岸側以降の海岸線沿いには長さ4kmにもわたる日本三大松原の『虹の松原』が広がっていた（図9）。河口付近の城下と松原と川。夕焼け色も加わり、黄昏には申し分ない風景。



図7 松浦大堰



図8 唐津城と松浦川河口



図9 虹の松原に差し込む夕日

3.4 古文書から復活した400年前の町切水車

(自然と暮らしを考える研究会)

河口まで一通り松浦川を案内していただいたところで日が暮れた。この日は石盛さん宅にお世話になった。石盛さんと話し始めたらお互いトークは止まらず、気が付いたら時計は午前2時を回っていた。

子曰く、学びて時に之を習う、亦た説ばしからず乎 朋有り、遠方より来る、亦た樂しからず乎(論語)

川を共通の対象として、熱く語れることこそ、川を学に志す者としての最高の幸せである。

夜が明け、支度をして早々に出発。最初の目的地は石盛さん宅からすぐの厳木川の町切用水。厳木川の町切堰から取水し、水を広く田畑に引き入れられる動脈になっている。しかしながら起伏のある田畑に広く水を行きわたらせるためにはこの水路一本ではなかなか難しく、そこで用いられていたのが水車である。古文書によると江戸時代この町切用水には8機の水車が設置されていたという。古文書の事実を知った石盛さん達は当時の水車を復元し、後世に残していくため、水車づくりに取り掛かる。もちろん誰も水車の設計などしたことがないので、試行錯誤しながら図面を書き、復元した。現在6機復元している。「朝倉の三連水車ほど見事なものじゃないけど、こんな小さな用水路でもその地域の歴史がある。だからこの水車の復元も意味があると私は思っているんだよね。」と石盛さん。おそらく日本全国多くの水路で水車を用いて田畑を潤していただろう。しかし、古文書をみて、実際に水車を復元した事例は稀なのではないかと思う。僕の実家の近くにも岡森用水があるが、もしかしたら水車があったかもしれない。用水路のそばには地主さんに厳木川そばの田んぼを提供してもらいつくった『相知水辺の楽校』がつくられていて、あずま屋やトイレなどがあり、地域の子供達の川基地になっている。厳木川の川遊びから上がればあずま屋でちょっと休憩し、すぐそばの町切水車を眺めて歴史も学べる場所だ(図10)。



図10 相知水辺の楽校と町切用水(冬季は水車なし)

3.5 自然再生事業で作りだしたアザメの瀬

町切水車を後にし、向かったのはアザメの瀬と呼ばれる氾濫原(図11)。ここは国土交通省の自然再生事業で、創出された全国17か所(九州2か所)の一つである。松浦川流域の場合、中上流域は平地や盆地が重なる地形により大きく蛇行しているため、洪水軽減に堤防をつくる方法や遊水地をつくる方法などさまざまな治水対策が検討されていた。しかし、自然再生事業では敢えて氾濫を許容し、下流の洪水の低減を図るという方策になったため、松浦川の洪水時には氾濫原に一時的に水が入り、魚の避難場所にもなる。もともと、昔川が氾濫すると、田んぼに水が入り、そこにドジョウやナマズ、コイなどが逃げ込むという当時の状況に近いものがある。大事なのは『場』の再生ではなく『機能』の復元再生と当時の武雄河川事務所がコンセプトを掲げている。高台からこの場所をみると、たしかにアザメの瀬付近の右岸側の堤防は無堤になっており、水が入ってきやすそうだ。

氾濫を許容することで生き物が逃げ込み、土地も肥え、さらにはそこが環境教育に優れた場として使われている。

この仕組みをつくったのが当時、武雄河川事務所長だった、現九州大学の島谷先生。石盛さんが、自然再生事業が開始される時の当時の話をしてくださった。

「当時島谷さんが赴任してこられた時、この事業に関する説明会を開いたんだよ。みんな関心は高くね、会場はいつもいっぱい。みんな国交省が自然再生なんて名ばかりじゃないかと半信半疑ながらね。でも島谷さんや国交省は本気だったよ。『これは国家的威信をかけて成功させる必要があるんだ』と熱く語ってね。最初から私達も一緒にこのプロジェクトの計画に携われたし、色んな人が意見を言い合えた。だからここは成功したんだと思う。今は『NPO法人アザメの会』ってのができて、ここを環境学習の活動の拠点にして活動しているよ。」最初の計画時からの住民参加を呼び掛けた合意形成が、この自然再生事業を一過性のものではなく、広がりをもたせたようだ。

(※自然再生事業に関する説明の引用は武雄河川事務所HPより

<http://www.qsr.mlit.go.jp/takeo/torikumi/azame/gaiyo.html>)



図11 自然再生事業で創出したアザメの瀬

4. 武雄河川事務所と佐賀水ネット

松浦川流域をみて周り、次に向かったのは、武雄河川事務所(図12)。現在は松浦川流域と六角川流域を管理している。ここで調査に関するヒアリングのため、事務所の方と佐賀水ネット代表の井上一夫さんが待っていて下さった。井上さんとは久々の再会だ。以前、九州川のオープンカレッジ in 佐賀の事務局を僕たちが務めた時、現地実行委員として、色々と調整をして下さった。また、武雄河川事務所を訪問するのは高校生の頃以来で懐かしい。高校生3年生の頃、当時の所長さんとワークショップで知り合い、事務所でアザメの瀬や石井樋、六角川の説明を聞いたあと、現地の武雄高校の科学部の高校生達と交流する機会があり、とても懐かしい。まさかその当時、調査でここを再訪するとは思いませんでした。

この佐賀水ネットという組織は約100団体の行政、企業、市民団体が参加する組織。大抵の場合、流域単位でネットワーク活動型の団体を形成することが多いのだが、この団体は佐賀平野をキーワードで団体を組織しているため、六角川、松浦川、嘉瀬川と流域を越えて一緒に活動している。もちろん石盛さんも参加団体の一つ。

佐賀水ネットは2003年に開催された佐賀水会議「低平地の水環境に関するフォーラム in 佐賀」において69団体の取り組みが発表され、交流が生まれたことをきっかけにこの集まりをなんらかのかたちで存続させていこうということのできたのが佐賀水ネットだ。発足当初は16団体からのスタートがいつの間にか100団体を越えたそうだ。流域のつながりを越えて、佐賀平野という共同体をつくり、連携をするのは面白い事例だと思う。河川事務所の1階にも地域連携窓口が設置されていて、地域の人が訪問しやすいような工夫がなされていた。ちなみにこの所長をされたOさんは転勤で部署が変わっても必ず毎年全国の川のワークショップに来られて水ネットの方と再会を喜んでいる。こういうつながりも水ネットの魅力の一つだろう。



図12 武雄河川事務所を訪問

5. 波佐見川、彼杵川(2級水系)

5.1 シーボルトの川づくり(波佐見川)

武雄河川事務所で色々とお話をいただいた後、石盛さんとはお別れし、次の目的地の長崎県波佐見町へ。「田崎のところまで僕が連れて行ってあげるよ。」と井上代表。本当に皆さんのご厚意が染み入る旅だ。

長崎県波佐見町を流れる川棚川は通称『波佐見川』と呼ばれている。ここで活動する『波佐見緑と水を考える会』の田崎武詞さんにお話を伺った。この会は1981年に発足した会で、もう20年以上経っている。この会は『シーボルトの川づくり』というキャッチコピーで活動している。180年前、長崎に滞在していたオランダ人のシーボルトは長崎周辺の魚種を持ち帰り、タイプ標本をつくっている。現在魚のタイプ標本となっている魚種はシーボルトが長崎で採集したものが多い。シーボルトが長崎から持ち帰った魚種は20種類と言われている。そのうちの9種類(カワムツ、オイカワ、カマツカ、アブラボテ、ドンコ、ナマズ、ヨシノボリ、イトモロコ、メダカ)が波佐見川に生息。もしかすると、シーボルトのタイプ標本はこの川の魚かもしれないと思うとロマンがある。シーボルトが180年後の現在の川に来たら「おいおい、俺はここで20種類捕まえたのに、今は9種類しかいないのかい？」と言うかもしれない。180年前に住んでいた魚が変わらず棲める環境を残していかなければと活動している。大きな目標だけど、極めて明確な理念だ。シーボルトをキーワードにした活動はユニークで、地元特産の波佐見焼を使ったタイルの看板(図13)を波佐見川に設置している。その他にも川づくりを考える『シーボルトの川づくり塾』や小中学生を対象とした年間活動の『シーボルト隊』など。最近では水辺の楽校も整備されて夏場は子ども達の遊び場になっている。シーボルトによって名づけられた(学名)の魚種が今後も棲み続けることを願う。



図13 水辺の楽校に設置されている波佐見焼の看板

5.2 『日本一美しい村』を目指して（彼杵川）

波佐見川を案内していただいた後は東彼杵町の彼杵川へ。「池田さんのところは隣の川だから送って行くよ。」と連れて行っていただいた。

東彼杵清流会の池田健一さんのところへ到着。2008年依頼の再訪。池田さんはキャンピングカーをつくる職人さん。アユの遡上できない川の状況に心を痛み、自身の大学時代の恩師の坂本栄治先生（元近畿大学教授/遠賀川水辺館）に川を見に来て、助言してほしいと2008年にアクションを起こしたことがきっかけで『東彼杵清流会』を立ち上げた。（その時僕も彼杵川を見学させてもらった。）池田さん達は子ども達に彼杵川に関心を持ってもらおうと小学校で出前講座をはじめた。池田さんの発信力あってか、校長先生、婦人会、町役場、県とどんどん応援団が増えていった。その甲斐あって、魚道の改築も決まった。彼杵川は2級河川で県管理の川であるが、池田さんの熱意に心を打たれた国交省の諫早出張所長さんからも応援団に。2012年には彼杵川のアユの産卵床づくりを小学生と一緒に行ってよりアユの棲みやすい環境を整えている。こんな短期間で問題がどんどん解決していくのは、一重に熱意が彼杵川を動かしたに違いない。

この日は池田さん宅に泊めていただいた。夜も池田さんと彼杵川の話が絶えない。「坂本君、今度はね、彼杵川だけじゃなく、山、川、海（大村湾）をテーマにした紙芝居をつくることを考えるとよ。」せっかくだからそれ、全国の川のワークショップで発表しようよと提案したら、「よし、今年それいけばい！あ、坂本君は今日から東彼杵清流会の顧問で広報担当がよか。」ということに。一夜のうちに顧問に就任。というわけで、これから広報担当としての職責を少しでも果たしたいと思う。池田さんが最終的に目指しているのは『日本一美しい村東彼杵』。全長7kmの小さな彼杵川は山、川、海が一体となって楽しめる。東彼杵ICからも近いので、土日にとって出かけてくつろぐのにおすすめ。ぜひ皆さんも一度彼杵川（図14）へ。



図14 東彼杵清流会が守る彼杵川

6. 長崎県の河川

長崎よか川交流会

翌日、池田さんに駅まで送っていただき、一気に長崎市内まで下る。線路は大村湾沿いに弓なりに続いている。内湾である大村湾は波が穏やかなため琴の海とも呼ばれている。福山雅治さんの『道標』（NEWS ZEROのED曲）の曲の歌詞に『私はこの海が好きです。この弓なりに続く線路の。あなたが生まれ育った海に来ると後悔が軽くなる気がして』とあるがこれは福山さんが生まれ育った長崎の大村湾や祖母のことを詠んだ曲らしい。そんな大村湾の美しさに心を惹かれながら長崎駅まで到着。

長崎市内で長崎よか川交流会会長の兵働馨さんにお会いするため、バスに乗り換える。しかし長崎市内でバスに乗ったことがなく、どの乗り場にいけないか突っ立っていると、「どうかされましたか？」とおじいさん。行きたい場所を告げると「それなら道路渡ってあっちの乗り場ですよ。」と教えて下さった。長崎の人の温かさを感じた。

兵働さんの勤務先にお邪魔させてもらった。兵働さんと現地でお会いするのは長崎県内で大学生等活動交流会をやって以来だ。長崎県内の川は、1級河川は本明川のみで、あとは全て小さな2級河川。あまり流域連携という文化が馴染まなかったようで、他の流域に比べて連携して何かをするという活動は少なかったようだが、2009年の長崎県波佐見町で行われたワークショップをきっかけに長崎県内の川で情報を共有していこうという機運が高まり、『長崎よか川交流会』が発足した。現在21団体が参加している。佐賀水ネットと同じように河川横断的にネットワークを組んでいる事例は九州内でもこの2つくらいだろう。長崎県内の川の共同意識を高めるため、波佐見川で行っていたシーボルトがみた魚種が転写された波佐見焼タイルの看板を県内の各地の川の魚種に合わせて建てているようだ。

兵働さんにお話しを伺ったあとは長崎河川国道事務所のY課長と合流。Yさんは遠賀川の出張所長時代からお世話になっていて、転勤されてから久々の再会。長崎市内の銅座川（図15）、中島川（図16）を歩き、概要を案内していただいた。ちょうどこの時、長崎ランタンフェスティバルのまっさかりで川にちょうちんがぶら下がっていて、人で川沿いが賑わっていた。

Yさんに説明を受けながら諫早市の本明川へ向かった。



図15 銅座川



図16 中島川

7. 本明川

本明川めぐりと本明川オピニオン懇談会

流域地図を見ながら移動すると、道路のわずかな起伏部分が流域界になっている箇所があった。流域界と言ったら峠道を抜けたトンネルなんかで確認することは多かったが、街中で確認できたのは初めてだった。

本明川流域に入り、最初に向かったのは本明川オピニオン懇談会代表の中原貴行さんのご自宅。約束の時間まで少し時間があるので自宅の目の前を流れる本明川を少し見学。本明川にはとほころどころ、『^{りくこう}陸閘』(図17)と呼ばれるスライド式の堤防があり、普段はここから川に降りていけて、出水時には素早くここを閉めて堤内地に水が入ってこないようにする仕組みだ。陸閘から河川敷の中へ入ると、川の中に飛び石が並べてあった。昔はここで洗濯や洗いをしながら日常のコミュニケーションの場になっていたようだ。

川を見た後、中原代表にお会いした。(ヒアリング調査には諫早出張所長のNさんも同行して下さいました。) 1995年から本明川に関心がある住民ではじめたのがきっかけ。ビン漬けと呼ばれる漁法を子供達に教えたり、本明川の夢プランを考えたりと様々な活動を行っている。ちなみにこの夢プランという名称は遠賀川の直方川づくり交流会の発案した夢プランから輸入した言葉だそうだ。「いつも近くで本明川を見ているからこそ洪水の驚異や川の魅力、色んなものが見える」と中原さん。中原さんも言われていたように本明川は度々洪水に悩まされてきた。本明川の河床個暗は急なため、上流で降った雨は市街地まで一気に流れ込む。また、同じ理由で平常時は流量が少なく、水資源確保が昔から課題になっていた。その典型例として上流域の富川に『五百羅漢』(図18)と呼ばれる姿勢がある。江戸時代(1699年)8月11日から降り出した雨は豪雨となり、13日には本明川が決壊し、487名が亡くなるという大きな被害があった。おまけに翌年は日照り続きの干ばつで作物が取れない事態にもなった。相次ぐ災害に心を痛めた領主の諫早茂晴が天災を鎮めるため、本明川の源である富川にこもって龍神をまつり厄払いと487名の冥福を祈り、富川溪谷のあらゆる岩に羅漢像を刻んだ。発見されているだけでその数羅漢像が500体、如来像が3体ある。実際に見学したが、どうやって彫刻したんだろうと思うような難所にも美しい曲線で像が刻んである。

現在本明川の本川には本明川ダムの建設が検討されている(図19)。パンフレットによると、完成すれば長崎県最大の貯水量のあるダムになるが、それでも860万 m^3 と1000万 m^3 に満たない。いかに洪水調整、水資源確保が難しい流域か分かる。



図17 本明川の陸閘



図18 富川溪谷の五百羅漢像



図19 本明川ダム予定地(検討中)

8. 旅のおわりに

本明川を見学した後は諫早出張所に向かい、出張所長に長崎県内の市民活動の実態についてお話を聞き、今回の調査は終了。出張所で一通りお話を聞き終えた頃、数人の事務所の方が会議を終えて出て来られた。「あれ、君、遠賀川の坂本君じゃないね？当時高校生だったのに、大人になったねえ！」「あれ、君、佐賀のオープンカレッジであった坂本君じゃないか。」と当時お会いしていた方々にも再会。覚えていて下さって大変うれしかった。たまたま事務所長にもお会いでき、今回の旅の目的をご報告して、無事に旅を終えた。今回も多くの方にお世話になりました。

